

# イチゴのハウス早熟栽培に関する研究

## 第2報 秋植えの定植時期について

横川 庄栄・黒田 吉則

(山形県立園芸試験場)

Studies on the Forcing Culture of Strawberry

Part 2. On the planting time in autumn

Syoei YOKOKAWA and Yoshinori KURODA

(Yamagata Horticultural Experiment Station)

### 1 ま え が き

山形県におけるイチゴの栽培面積は、約300haであり、近年、簡易なパイプハウスで栽培でき、収益性の高いハウス早熟栽培が急増しており、栽培面積の約60%を占める。

本県におけるパイプハウスの作付体系は、イチゴ+抑制メロンが基幹であり、イチゴの定期時期は前作との関連から遅い程有利であるが、従来、本県における早熟イチゴの定植期は9月下旬とされており、遅れると著しく減収していた。

又、近年、ウィルスフリー苗が導入され、安定的増収がもたらされた反面、従来の罹病株より生育がおう盛であるため、早熟栽培では過繁茂、収穫期遅延などの問題が生じているので、栽培方法改善のため一連の試験を実施した。

前報では栽植様式について明らかにしたが、定植時期についても遅植えの期待がもたれたので、苗の大きさ及びマルチ時期との関連で50~51年に検討し、定植期の晩限について明らかにしたので報告する。

### 2 試 験 方 法

- 1 供試品種：宝交早生
- 2 試験区：表1の通り

表1 試験区

年次	区	定植時期	仮植時展開葉数	マルチ時期
50年	1	10月1日	2	春
	2	〃	3	〃
	3	〃	4	〃
	4	10月9日	2	〃
	5	〃	3	〃
	6	〃	4	〃
	7	10月18日	2	〃
	8	〃	3	〃
	9	〃	4	〃
51年	10	10月11日	3	〃
	11	10月25日	3	〃
	12	11月5日	3	〃
	13	〃	3	秋

### 3 栽培概要

- (1) 仮 植： 9月6日(50年), 9月5日(51年)

- (2) 栽植距離： うね幅180cm 株間18cm 2条植え
- (3) 施肥量： (a当り成分量)  
N-1.2kg P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-0.7kg K<sub>2</sub>O-1.0kg
- (4) ハウス被覆： 2月3日(50年)  
2月2日(51年)
- (5) トンネル被覆： 2月20日(50年)  
2月25日(51年)

### 3 試 験 結 果

1. 生育(50年)10月18日までの範囲では、遅植え区が越冬直前の葉数少ないが、開花時では、逆にやや多くなり、葉柄長はやや短くなった。芽数、花房数では、10月18日定植区がやや少なかった。

仮植時展開葉数との関連では、越冬直前の葉数は、仮植時展開葉数の多い区程、定植時期にかかわらず多く、開花時では、2葉時仮植の各区がやや少ない傾向を示した。葉柄長については明確な傾向がみられなかった。花房数は4葉時仮植の各区がやや少なかった(表2)。

(51年)定植時期を更に遅らせて検討した結果、生育は11月5日定植区がやや劣り、10月11日と10月25日定植に差はみられなかった。着花数は定植が遅れるにしたがい少なくなった。

又、秋マルチをすることにより生育はおう盛となり、11月5日定植の秋マルチ区は、10月11日定植より生育がまさり、芽数、花房数、着花数とも増加したが、収穫果率で劣り、過繁茂の草勢となった(表3)。

2. 収量、品質(50年)早期収量は遅植区が多く、特に早植えの10月1日定植区が少なかった。

仮植時展開葉数では、2葉時仮植の各区で早期収量が多かった。

遅植区は大果率低く、商品収量が少なかった。この傾向は大苗仮植ほど著しいが、2葉時仮植では、逆に遅植え区が多収となった。これは仮植日が同じであるため、2葉時仮植の10月1日定植区は極端な若苗定植となったためと思われる(図1)。

(51年)定植時期を更に遅らせても同様な傾向であり、早期収量は定植時期の早い11月11日定植区と、生育のお

う盛となった11月5日定植の秋マルチ区が少なかった。 繁茂の草勢となった11月5日定植の秋マルチ区で収量、品質  
10月11日定植区で収量多く、大果割合が高かった。 過 質とも劣った(図2)。

表2 生育と着花(50年)

項目 区	越冬直前(11/16)		開花期(4/4)		収穫終了時(5/26)			
	葉数	葉柄長(cm)	葉数	葉柄長(cm)	芽数	花房数	着花数	収穫果率(%)
1	6.2	4.7	22.9	27.6	8.1	7.6	67.7	69.3
2	6.8	4.4	23.9	27.7	8.0	7.7	76.3	71.4
3	7.1	4.4	24.3	28.2	7.8	6.9	68.5	80.4
4	6.0	4.8	29.9	26.3	8.2	7.2	71.2	78.1
5	6.3	5.2	29.7	26.6	8.3	7.9	80.0	71.8
6	6.8	4.6	31.5	25.8	8.2	6.9	80.3	77.1
7	5.1	4.6	25.1	26.5	7.4	6.5	71.9	70.8
8	5.4	5.9	28.2	26.5	7.8	6.4	66.6	80.3
9	6.0	4.7	27.7	25.9	7.5	6.3	72.8	72.0

表3 生育と着花(51年)

項目 区	越冬前(12/7)		収穫始期(4/20)		収穫終了時(6/1)				
	葉数	葉数	葉柄長(cm)	芽数	花房数	着花数	収穫果率(%)	生体重(g)	
								地上部	地下部
10	—	30.6	40.7	6.5	10.5	103.2	55.0	307.2	53.4
11	7.6	31.1	39.1	6.8	10.3	101.8	59.3	321.3	53.0
12	8.0	29.4	40.2	6.8	10.7	96.5	59.7	272.9	53.8
13	8.6	32.2	41.6	8.0	11.3	105.8	53.1	339.0	62.5

又、定植時のマルチは、芽数、花房数が増加し、生育は  
おう盛となるが、増収効果は認められず、更に、マルチ作  
業が、春マルチより労力がかかるので、本作型での実用性  
はない。

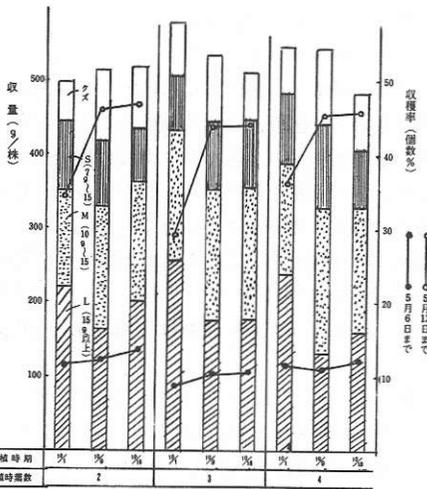


図1 定植時期、仮植時葉数と収量、品質(50年)

4 ま と め

定植時期が遅れるにしたがい、大果率が低く、商品収量は少なくなる傾向があるが、早期収量は増加し、11月5日頃までの定植であれば、根に十分土をつけて植える条件で実用性がある。

なお、遅植えする時は、仮植時葉数が多くなる程減収割合が多くなるので、9月上旬に展開葉数2~3枚で採苗するのが適当である。

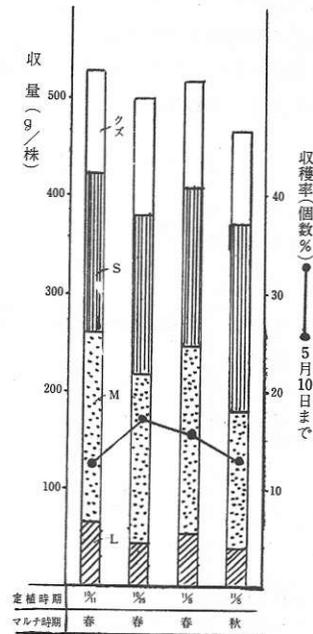


図2 定植時期、マルチ時期と収量、品質(51年)